

史上初の「市民創発事業」が生んだもの

～開国博Y150テーマイベント

「ヒルサイドエリア」で何が起こっていたか～

福前 明日香

都市経営局政策課

元ヒルサイドサポートスタッフ

石塚 清香

総務局情報システム課

元ヒルサイドサポートスタッフ

御調 知伸

都市経営局大都市制度・地方分権推進課担当係長

元(財)横浜開港150周年協会Y150つながりの

森会場運営統括課長

沼田 真一

早稲田大学参加のデザイン研究所客員研究員

元ヒルサイド市民創発チーフファシリテーター

1 はじめに

2009年、横浜では開国博Y150ヒルサイドエリアにおいて、史上初の「市民創発事業」が展開された。しかし、市民創発事業とは何なのか、どのように設計され、そこから何が生まれたのか、十分に語られていない。そこで、市民及び設計者へのインタビュー結果を踏まえ、ヒルサイドの「市民創発事業」を考察することとした。

2

開国博Y150テーマイベント「ヒルサイドエリア」の概要

ヒルサイドエリアは、2009年に実施された横浜開港150周年記念イベント「開国・開港Y150」(愛称:開国博Y150)のテーマイベントのひとつである。「横浜開港150周年基本計画(2006年6月)」で開催が公表され、2007年に設立された「財団法人横浜開港150周年協会」が実施した。ズーラシア隣接地区を会場とし、「私からはじめよう」からの「150年」をテーマに、市民自らプロジェクトを企画・出展する「市民創発プロジェクト」を展開した。ここでは182の市民創発プロジェクトが生まれ、2009年7月4日(土)～9月27日(日)の86日間、ワークショップ、パフォーマンス等、来場者が対話・参加・体験できる様々なプログラムが行われた。

自然との共生をテーマとした会場は、中央に竹の大屋根「竹の海原」を配置し、それを取り巻くように風、水、丘、木立の広場を設け、棚田や段々

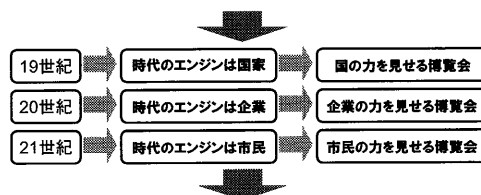
畑を作り、横浜の原風景の再現を試みた。竹の海原は、里山の生態系が損なわれる原因の一つである「竹」の活用実験場としての位置づけを持ち、制作にあたっては横浜市内の手入れが必要な竹林からの切り出しを行った。(写真1)

3 史上初の「市民創発事業」

(1) 市民創発とは

「市民創発」とは、市民一人ひとりが持続可能な社会を目指し、活動(プロジェクト)を創造し、他者に思いを伝え、周りを誘発し、より多くの他者に発信する、新しい市民参加の形である。事業コンセプト及び実施計画の前身は、2005年に開催された「愛・地球博」の瀬戸会場で行われた「市民参加プロジェクト」である。当時事業を担当していた愛・地球博・市民参加プロデューサー小川巧記氏は、「万博は、時代のエンジン(図1)と語る。愛・地球博は、21世紀の時代のエンジンを見せるショールーム。20世紀は企業、19世紀は国家、21世紀は企業であったが、21世紀の時代のエンジンは「市民」である。市民が時代に関わり、課題を解決していく姿や力を見せるため、愛・地球博において

万博は、時代のエンジンを見せるショールーム。



21世紀の博覧会は、21世紀の時代のエンジンを見せなければならない。愛・地球博は、21世紀の時代のエンジンとして市民・生活者の力を見せる万博



写真1 竹の海原

図1 万博の定義

「市民参加事業」を実施した。(図1)と語る。愛・地球博の「市民参加プロジェクト」では325のプロジェクトを生み出し、のべ3万5千人が市民スタッフとして参加した

ことで成功を収め、ここから「市民創発」という言葉が生まれた。そして、開国博Y150では小川氏を総合プロデューサーとして迎え、多数の愛・地球博経験者の知見を惜しみなく注ぎ込みながら史上初の「市民創発事業」を設計し、「ヒルサイドエリア」で展開した。

開国博Y150で展開された多様な市民参加事業のうち、ヒルサイド市民創発は、参加者募集から閉幕後の最終的なワークショップまでの期間がおよそ2年におよび、最も長期に渡る市民参加となった。なお、開国博Y150の市民参加事業の参加実人数34、005人のうち、ヒルサイド市民創発（竹の切り出し含む）の参加者は10、868人を占めている。

(2) 「市民創発事業」の3つの視点

市民創発事業は、①「個人」であること、②「フラットな関係を結ぶこと」③「プロセスを大切にすること」という3つの視点を重視して設計されている。まず、参加主体は組織の一員としてではなく「個人＝私」という一人称単

数であることを前提とした。

これは「個人として立つほど、人は他者を求めるようになり、他者と本当のつながりを構築するようになる」という考え方に基づいている。そして、「個人」が「上下関係ではなくフラット（水平）な関係を構築すること」を重視し、その中で「良いプロセス」を生み出すことを目指した。これは「20世紀、企業に代表される「組織」の「ピラミッド型」の構造の中で「成果」を追い続けたことが、様々な関係性を破壊し、環境問題をはじめとした多くの社会的な問題を引き起こしてきた。21世紀の今、人は「個人」という単位に立ち返り「フラット」にながりにながら「良いプロセス」を生み出す必要がある」との考え方に由来する。（図2）

(3) 「市民創発」の理念を具体化する設計

①市民参加による事業コンセプトづくり
市民創発事業では、市民の企画段階からの参加を重視した。事業コンセプトの策定にあたっては、公募市民を交え「市民ダイアログ（意見交換会）（2007年6月〜7

月）を実施した。「なぜ、いまイベントを行うのか」、その目的と意味をワークショップ型で議論し、このとき生まれたのが、「Y150つながりの森の世界観チャート」である。（図3）ヒルサイド会場では、これからの持続可能な社会の実現を目指して、「過去・現在・未来、地域と地球、自分と他者」のさまざまな要素を「つなげる」世界を創ることが目標とされた。

②創発支援プログラムの実施
①を受けて決定した「私から始めるこれからのY150年」をテーマに市民創発メンバーを募集し、応募した308名を対象に2008年1月から「創発支援プログラム」をスタートした。創発支援プログラムは、「参加」「体験」「対話」をキーワードに、来場者に共感を呼ぶ出展を作るための勉強・交流・意見交換会等のプログラムで、開催回数は公式なもので合計30回を超える。「横浜らしさの検討」「自分の能力再整理」「プロジェクトの事例紹介」「プレイベ

ント」「広報計画」「予算計画」「会場レイアウト検討」など、イベント終了後も自分たちの手で活動を維持・発展していくような知識やノウハウ、ネットワークを創りだすことを目指し、設計された。

③伴走役制度（ファシリテーター制度）
プロジェクトにはそれぞれ「伴走役」という担当の専門スタッフがつき、出展の具体化に向けたアドバイスや事務局との調整などを行った。愛・地球博では、市民プロジェクト

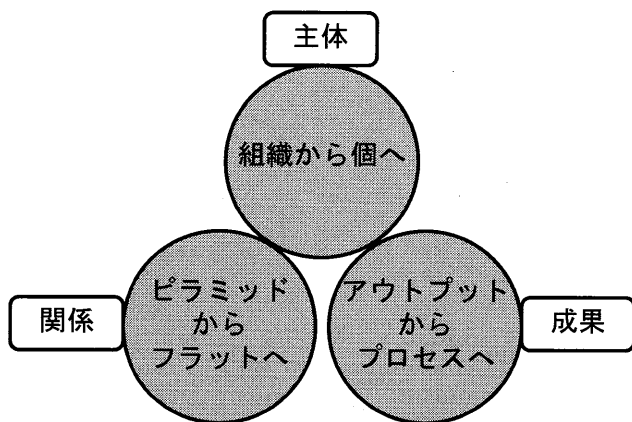
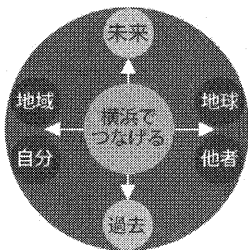


図2 参加のデザインの3要素

これからの持続可能な社会の実現を目指して、「過去・現在・未来、地域と地球、自分と他者」のさまざまな要素をつなげる



市民創発プログラムは「つながり」を創出する。

図3 Y150つながりの森の世界観チャート

トに対してアイディア出しや時には決定権を持つ事務局スタッフがディレクターとして関わったが、「市民対事務局」という対立構造が生まれることがあった。今回のヒルサイドでは、市民と事務局の間の調整を「伴走役（ファシリテーター）」という市民でも事務局でもない中間的存在が担うことで、参加者対主催者という対立構造を乗り越え、よりよい出展を生み出すことを目指した。また、イベント終了後を見据え、伴走役がいなくなっても市民が主体的・自立的に活動を継続できるように、専門的なノウハウ・スキルを伝えるなど、各個人に応じた能力開発を目指した設計がされていた。さらに、「市民創発事業」の市庁内における理解促進と長期的な人材育成の観点から、市職員から「ファシリテーター」役のボランティアを募り、ワークショップの運営補助等を行った。これは博覧会級のイベントでは初めての試みであった。

④拠点の設置

ヒルサイド市民創発事業では、創発メンバー同士がフラットにつながり、意見交換・情報共有や情報発信等が行える

場として、2つの拠点をリアルとバーチャルの世界において。創発支援プログラムの実施拠点として閉校となった「旧若葉台西中学校」の活用を行ったことと、創発メンバー限定のSNS「創発メンバーフォーラム」の運用である。

4 「市民創発事業」が生んだもの

ヒルサイド市民創発の応募者総数は308名であるが、特筆すべきは30代を筆頭とし、20代、40代という現役世代、子育て世代が多く参加していることである。また、10代から80代までバランスよく参加している。(図4)若い世代が、自分の生活だけでなく公共にも目を向け始めている時代性がうかがえる。そして、ヒルサイドでは「個人」としての参加を前提に、気軽に参加できる間口を広げたことで、今まで市民活動をしたことがなかった層、行政にかかわりのなかった新しい層が参加しやすかったと考えられる。

では、多様な世代・立場の人が集う市民創発事業で何が生まれていたのか。参加者に起こった「小さな物語」とと

もに考察したい。

(1) 家族とつながるゝ家族内の関係性と意識の変化

ヒルサイドで特徴的だったのが、プロジェクトの実現にあたり自分の家族を巻き込む参加者が多かったことである。A氏も自分の家族を巻き込んだ一人だった。「実は夫は私がボランティアをすることが理解出来ない人でした。すぐに辞めるだろう、いつか辞めるだろうと思われていました。そんな中では相談もできないですし、家族から孤立しそうな時もありました。しかしイベントが終盤にさしかかりいよいよ人手が足りないというときに夫も手伝わざるをえない状況になりました。夫は実際に参加している人の姿を見て、子供たちと触れ合ってみて、「こういう活動も良いものだ。もっと早くから関わっていたら良かった。また機会があったら参加したい。」というほどまでに変化しました。」

(2) 自分とつながるゝ夢に気づき行動をはじめた若者

20代のB氏は、自分が何を実現したいのかわからないままヒルサイドに参加していた。

「色々な方と出会って話をする中で、自分が何を実現したいのかが見えていきました。ヒルサイドは自分にとってまさに「居場所」でした。このような居場所を必要としている若者は多くいると思います。今度は、自分の力で、人がつながり、生きる価値を見いだせるような「居場所づくり」をしたい。そのために今ではNPOの勉強会などにも積極的に参加しています。」

(3) 社会とつながるゝ想いを言語化し、手に入れた「伝える力」

コスプレに関する出展を行ったC氏。「コスプレは華やかそうに見えて、実は閉じた世界です。人から偏見をもたれ攻撃されることもあります。しかし一方で、普段は人前に出ることができないが、コスプレなら外に出られる人がいるなど、人によっては社会とつながるツール、セーフティネットになっています。また、国際交流の一助となるなど様々な可能性を秘めています。コスプレの世界を知ってもらおうこと、誤解を解くことを目的に、ヒルサイドに出展しました。最初は自分が何を伝えた

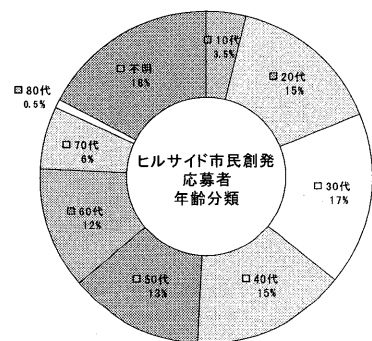


図4 ヒルサイド市民創発応募者年齢分類

いのか、どう伝えればよいのかがわからなかった。創発支援プログラムを通じて自分の思いを整理する中で、コスプレを知らない相手にもわかるように伝える言葉を手に入れました。手伝ってくれる仲間も出てきました。企画書を書く、スケジューリングや広報の仕方など様々なノウハウも身につけました。今では、大学で特別講義を行ったほか、他都市のサマーセミナーなどでもお話ししています。」

ヒルサイド閉幕1か月後の2009年10月、創発支援プログラム最終回が行われ、創発メンバー約100名が「自分にとってのY150ヒルサイドに関わった成果」について振り返った。参加者からは

「今まで漠然と『やりたい』と
思っていたことを実現できた。」
「自分の研究テーマに関する
新しい協力関係を手に入れる
ことができた。プロジェクト
をさらに大きくしようと思え
た。」「Y150」という大
きなテーマだったため、普段
出会う機会のない、多分野の
人が一堂に会し交流した。分
野が違っても目指しているこ
とや根底の想いは同じだとい
うことがわかった。「ヒルサ
イド会場ではブースを区切る
仕切りがなかったため、他の
ブースにも入りやすかった。
間違っても入ってくるお客さん
も多くいた。色々な人がまぜ
こぜになり、当初想定してい
なかった新しい分野や人との
出会いがあった。」等の意見
が出され、「ヒルサイドの成
果」として共有された。

5 「市民創発事業」を行う 意味

(1) ソーシャル・キャピタル醸 成の装置

現代では、他者との関係性
の希薄さが、孤立死などの様々
な社会的問題を生んでいる。
市民創発事業では、市民が一
人の「個人」として他者と関

係性を結ぶこと、つまり、
「つながらる力を育むこと」を、
公共イベントという一定の安
全性を担保した空間の中で行っ
てきた。パットナム(注1)
が「信頼」「規範」「ネットワー
ク」からなる「ソーシャル・
キャピタル」という概念を論
じているが、このイベントは
まさに「ソーシャル・キャピ
タル」を生み出す装置であっ
た。

(2) 「非日常」の効果とキャパ シティ・ビルディング

市民が、自分が何を実現し
たいかを考えるときに、イベ
ントという「非日常性」の空
間を作ることで、日常生活で
の制約を一定程度取り払い、
自由に夢を描くことができる。
そして、創発メンバー同士で
夢を語り合い、想いを共有す
る中で、夢を応援し合う同志
ができる。仲間から背中を押
されることで、普段不可能に
思えることでも実現できそう
な感覚を抱く。また、想いの
実現にあたっては、法・制度、
難解な行政用語などを「翻訳」
する伴走役(ファシリテーター)
がいることで実際に実現可能
性が高まる。さらに、今やら
ないと次の機会はないという
「イベントの一回性」が参加

者を駆り立て、出来ないと思っ
ていたことが実現する。この
「やればできる」という成功
体験は、市民にとってとても
大きな自信となる。

また、出展までの準備期間、
市民は出展のコンセプトから、
制作、運営、広報、会計まで
自ら行うことが求められる。
多様な人々の協力を得て実現
に向かう中で、参加者一人ひ
とりの能力開発がされる「キャ
パシティ・ビルディング」が
行われている。

(3) 「クリエイティブシティ」 の担い手と「持続可能な都 市」へ

このように、イベントとい
う「非日常」の空間で力をつ
けた「個」が、今度は自分の
「日常」の中で力を発揮する。
イベントは人が人とつながり、
自分らしく力を発揮するため
のプラットフォームとして寄与
している。「クリエイティブ
シティ」とは、創造的な活動
に寄与するこうした市民を創
出することにあるのではない
だろうか。ウィラー(注2)

は持続可能な都市の定義に
「参加と協働」をあげている
が、「個」として市民一人ひ
とりが変化することが、地域
を変え、横浜を変え、世界を
変えていくことにつながると
考えられる。(写真2)

6 「市民創発事業」から育 ちゆく芽

Y150の閉幕後、市民活
動を支援する事務局機能が失
われ「市民創発」は市民の手
に委ねられた。2009年10
月に旭区で行われた「次のつ
ながりを考えるミーティング」、
2010年7月の「ヒルサイ
ドメンバー懇親会」等が創発
メンバーによって企画される



写真2 市民創発メンバー

とともに、個々の活動も展開
を見せている。これらの軌跡
は有志が作成したヒルサイド
アーカイブ (<http://wiki.in-vedoor.jp/y150saya/>) にも
蓄積されているので、ぜひ一
度ご覧いただきたい。

開港150周年を契機に、
新しい横浜を創り出す種が蒔
かれた。地域課題の解決や、
自立した持続可能な市民活動、
「新しい公共」などの現代の
 키워ドを考えるとき、ヒ
ルサイドの「市民創発事業」
のプロセスと成果は、そのヒ
ントとなるはずである。今後
もこの「つながりの実験」
にどのような効果があったの
か、他の政策や市民参加の事
業でどう活かせるかを、行政・
市民ともに長期的な視点で考
えることが必要だろう。

(注1)

Putnam, Robert D. (1993).
Making Democracy Work, Civic
Traditions in Modern Italy,
Princeton Univ. Press. を参照

(注2)

Wheeler, S. (1998).
Planning Sustainable and Livable
Cities, in Legates, R. T. &
Stout, F. (2007), The City
Reader Urban Reader Series.
Fourth edition, Routledge. を参照